

詩篇119篇 1～8節

- 1 幸いなことよ。全き道を行く人々、主のみおしえによって歩む人々。
- 2 幸いなことよ。主のさとしを守り、心を尽くして主を尋ね求める人々。
- 3 まことに、彼らは不正を行わず、主の道を歩む。
- 4 あなたは堅く守るべき戒めを仰せつけられた。
- 5 どうか、私の道を堅くしてください。あなたのおきてを守るように。
- 6 そうすれば、私はあなたのすべての仰せを見ても恥じることがないでしょう。
- 7 あなたの義のさばきを学ぶとき、私は直ぐな心であなたに感謝します。
- 8 私は、あなたのおきてを守ります。どうか私を、見捨てないでください。

詩篇集の中の最長篇、聖書全体の中でも最も長い章、詩篇119篇に取り掛かります。大海原に舟で漕ぎ出すような心境です。幼少の頃、姉に「詩篇119篇を開いてみな」と言われ、繰り返しページをめくってもなかなかゴールが見えてこないことに驚嘆したのを思い出します。本篇を一回で扱うのは困難であるため、八節ずつに分けて学んでいく計画です。本篇は長いとはいえ、ヘブル語アルファベット22文字の「いろは歌」になっており、各字につき八つの節でまとめられています（つまり、22回に分けて学ぶということ）。更に、その八つの節の全部が行の最初で同じ文字を使っているという、きわめて技巧的な詩篇なのです。

אֲשֶׁרִי תְּמִימֵי־דָרְךָ הָהֵלְכִים בְּתוֹרַת יְהוָה:
 אֲשֶׁרִי נִצְרִי עֲדָתְךָ בְּכָל־לֵב יְדָרְשׁוּהוּ:
 אֲךָ לֹא־פָעֵלוּ עוֹלָה בְּדַרְכֶיךָ הַלְכוּ:
 אַתָּה צוֹיִתָּהּ פְּקֻדֶיךָ לְשֹׁמֵר מְאֹד:
 אַחֲלִי יִפְנוּ דַרְכֶיךָ לְשֹׁמֵר תִּקְוֶיךָ:
 אֲזַל־אֲבוֹשׁ בְּהַבִּיטִי אֶל־כָּל־מִצְוֹתֶיךָ:
 אֲוֹדְךָ בִּישָׁר לִבְבִּי בְּלִמְדֵי מִשְׁפָּטֶיךָ צִדְקָתְךָ:
 אַתָּה־תִּקְוֶיךָ אֲשֹׁמֵר אֶל־תַּעֲזֹבֵנִי עַד־מְאֹד:

技巧的と言えばもう一つ、本篇の中心主題を「神のことば」としながら、全節にそれと関連する語が用いられているというのにも驚かされます。これについては本文を学びながら説明させていただきますが、実は一つだけ例外があることにもふれておきましょう。「全節」とは言ったものの、なぜか122節だけにはその語が入っていないのです。作者はわざとそうしたのか、うっかり入れ忘れたのか。どうも前者が正解なようです。このことについて、小

畑進先生は桂離宮を例に挙げて説明しておられます。

「京都の桂離宮には、一か所だけ作りかけの窓が残されています。それは、離宮が完全ではないことを物語るという技巧中の技巧と考えられています。そのように、この第119篇は、入念な上に入念につづられていますが、人間の業には完成はない、との自覚を逆行で映し出す超絶技巧なのではありませんか。」

(詩篇講録《下》 p. 787)



なぜか第2楽章までしか作られなかったシューベルトの交響曲第7番「未完成」や、時間がなかったという理由で二つの楽章のみで締め括られてしまったベートーヴェンの32番ソナタなども、類似的な意味を持つと言えましょうか。演奏者や聴衆は、この「空洞」に無限の意味を探し求めるのです。

本文で付けた黄色の部分が本篇の主題である「神のことば」と関連する語です。

「**みおしえ**」(תורה/トーラー) …… 「法」「指示」「指導」

1節では「**主のみおしえ**」とされており、神の法、神の指導、神からの指示であることが強調されています。

「**さとし**」(עדה/エーダー) …… 「証言」「証人」「証書」

2節では「**主のさとし**」となっていますので、主が一文字ずつ書き留められた御言葉を守るべきことが教えられているのでしょう。

「**道**」(דרך/デレク) …… 「道」「通り」「距離」「旅」「マナー」

3節では「**主の道**」であり、これも神によって定められた、人の行くべき道という意味でしょう。

「**戒め**」(פיקודים/ピックディーム) …… 「原理」「原則」「(宗教的な) 教え」「法規」

4節では「**堅く守るべき戒め**」と、念入りな言い方がされています。神が定められた原則を甘く見ることなく、常に意識して行なうことが教えられています。

「**おきて**」(פיו/ホーク) …… 「法規」「命令」「限度」「規定された事柄」「義務」

5節と8節では「**あなたのおきて**」と二人称の所有格が用いられています。ここには詩人と神との関係の親しさが現れており、詩人は神に定められた事柄に厭々従っているのではなく、これを喜んで行なおうとしていることが窺えます。

「仰せ」(הִשָּׁמַע／ミツヴォート) ……「戒め」「十戒」

6節では「あなたのすべての仰せ」と言われていて、ここでも二人称の所有格が用いられています。更に、詩人が愛している戒めは一つではなく、「すべて」であることも心に留まります。

「さばき」(צְדָקָה／ミシュパート) ……「裁き」「正義」「命令」

7節では「あなたの義のさばき」とされており、その裁きが神の正義に基づくものであること、「私とあなた」の関係において神が守ってくださるものであることが強調されています。

もう一度冒頭に戻ってみますと、1節と2節は「幸いなことよ」ということばで始まっていることに気づかされます。この語り出しは、詩篇1篇や山上の説教の「八福」を思い起こさせます。この詩人はどのような人を「幸い」と呼んでいるのでしょうか。本篇全体で語られていく「神のことば」を愛する人、それが彼にとって「幸いな人」なのです。神のことばを守り行ない、神が与えてくださった「みおしえ」「さとし」「道」「戒め」「おきて」「仰せ」「さばき」を自分の人生の道しるべとして高く掲げ、常に心の中心に置くことです。その道を歩むとき、困難と直面する日もあるでしょう。ダニエルは神のことばに従うがゆえに、異国の民に妬まれ、ライオンの穴にまで投げ込まれました。しかし、それでも彼の人生は終わりまで「幸い」だったのです。

これから本篇は、ひたすらこの「幸い」を追求していきます。すべての節に「神のことば」を置いて、読者の人生にとっての「幸い」を考えさせるのです。122節に一息が入るのは、そこに私たちが考える余地が与えられているということではないでしょうか。如何なる困難がやって来たとしても、失うことのない「神のことば」を心の王座に置いて歩いていきたいと思います。